

小学校の現場で感じたこと

—副担任としてのささやかな実践—

齋藤 美和

銀髪の美しい故川崎千東先生と出会ったのは、三十年前のことである。先生の著書『さわらび』（フレーベル館一九八〇年）を読んで、また先生と同じ園で働く機会を得て、私も先生のように、銀髪になるまで、保育者として実践したいと願つたものだった。そして、子どもにとつても大人にとつても「幸せな保育」とは何かを求めて、夢中で子どもたちと生活した。

家庭の事情で、七年前にやむなく現場を離れたが、子どもたちとの生活が忘れられず、居住地のN市で、小学校一年生の副担任制度を発足させることを知つて応募した。子どもの気持ちに寄り添い共感し、子どもと共に生活する幼児教育の場と、子どもに教えることを優先させる学校教育の場という大きな違いはあっても、子どもにとつて何が大切なかを考えて接するこ

とができるなら、幼稚園での経験が、学校教育の場できっと生きるはずだ、と考えての応募であった。

四年ぶりに接する子どもたち。学校生活初めの一歩で、子どもたちがつまずかず、スマーズに歩き出せるようとの配慮から「副担任」制度は発足した。

しかし、実際の小学校の先生たちが願っていたのは「少人数学級」の実現だ。先生たちにしてみると、教室の中に他の人が入ってくることはあまり歓迎しないこと。それは、幼稚園で担任をした経験のある私にも理解できる。自分の教育の意図を理解して入ってくれる人ならいいが、そうでなければ、一寸厳しい指導をする、「何で……」と思つて子どもをかばつてしまふかもしれない。また、子ども一人ひとりで状況が違うので、指導の仕方も一寸ずつ変わつてくるが、それが第三者には理解してもらえないこともあります。私自身が担任をしていて、教育実習生を受け入れた時には、こんなジレンマを感じる場面がいくつもあつた。

しかしこの思いは、大人側の狭い発想で、子どもに

とうては、いろいろな見方をしてくれる人がいる、ということはとても幸せなことではないかと思う。

私が配属になつた小学校では、一年担当の先生方が、副担任を快く受け入れてくださつたので、スマーズに仕事を始めることができた。小学校では、三年間副担任として子どもたちと生活した。

その時の子どもたちとの実践のいくつかを、ここに紹介したい。

T男とのかかわり

T男は、読み書きがまだ十分ではない。ひらがな表の順でないと読み方や書き方がわからず、そのため表を見ながらなので、作業も遅くなつてしまつ。教科書をうまく読むこともまだできないが、読みたい、書きたいという気持ちは強く、発言しようとの意欲もある。

しかし、家庭では父親が違う赤ちゃんの世話を母親が忙しく、また、入学前には「虐待」の相談も受けて

いたと聞いた。そんな状況での家庭は、彼の勉強への意欲を援助できるような環境ではなかった。私は、そんな彼の気持ちを汲んで、一緒に音読に取り組んだ。音読の宿題が出た時には、カードに題名を書けないのでは、家でやつてくることができなかつた（音読カードに自分で題名を書いて、家の人にチェックしてもらうことになつていた）。そこで、私が彼の読みたい単元の題名をカードに書くことにした。翌日「せんせいみてー」と、母親がカードに○を付けてくれたところをうれしそうに見せてくれた。休み時間には、たどたどしくではあるが、教科書を読んで聞かせてくれた。今後の学習活動に、どんな効果をもたらすかはまだわらないが、やりたいという気持ちを後押しできたことはとてもうれしいことである。

T男については、担任の先生も配慮していた。彼は「虫博士」と友達があだ名するほど虫のことに詳しいのを、ちゃんとつかんでいて、音読のテストをする時

には、彼には虫の教材を扱つた「だれだかわかるかな」の単元を読ませたりした。彼の家庭の状況についても、副担任にもきちんと話して、一緒に子どもを育てていこうとの姿勢が感じられて、私も大変に動きやすかつた。

M子とのかかわり

二学期後半になると、算数では繰り上がり、繰り下がりの計算になつて、理解の早い子と遅い子で、大きな差が出てくる。M子は、何事にもスローテンポで、算数の五十問プリントをするのにとても時間が掛かっている。理解していないわけではないが、取り掛かりが遅く、時間ぎりぎりまで掛かって取り組んでいる。自分から「わからないからおしえて」と話すことは無く、この日も机間巡回をしてると、通り過ぎた時に、服を引っ張つて目で訴えてきた。そこで、一つずつ問題を指で押さえて、「ハイ、これ」「ハイ、次」と問題を示してやると、自分で計算し、答えを書き始め

た。M子の場合、問題をやり終えるまでそばで見ていてほしいという気持ちの表れから、私の服を引っ張つたと思う。明らかにまだできない子、理解していない子、手の掛かる子には相当時間をかけて接し、説明したりなどかかわるが、時間が掛かっても自分で取り組んでいる子には、あまりかかわれることもある。しかし、M子の「わたしのほうもみてよ」というサインを見逃さず、かかわることができたと思う。

T朗とのかかわり

このクラスの担任の先生は、この道三十年近いベテランである。国語での漢字の教え方や、算数での教え方などひとつずつ時間をかけて、囁んで含めるように丁寧に教えてくれる。大人の私も思わず授業の中に引き込まれてしまうことが多かった。

子どもたちには、自立して物事に取り組んでほしいとの気持ちが強く、困った時には、自分で解決することを求めていた。子どもたちもそんな先生の思いをわかっていたので、一生懸命学習に取り組んでいた。甘

えたい気持ちを大っぴらに表さず、M子のような方法で示す子もいた。彼女は甘えることに飢えていたような面がある。先生もそのことは承知していて、時には厳しく、時には彼女をうまくもち上げて接していた。私も先生の方針を理解して接するよう心がけていたが、この時には、彼女の気持ちに寄り添つてかかわることができたことをうれしく思う。

T朗は、授業時間になつても着席せず、教科書などの準備もしない。私は、そのつど働きかけて、教科書を出させたり、鉛筆を探したりするが（いつも筆箱にしまうこととは無く、道具箱にバラバラに入つていたり、床に散らばつていたりする）、「うるせー」と言われたり、プリントを投げ捨てたりする。家庭の事情もあってか（三歳まで父母の都合で、父母とは離れて暮らし、祖母に育てられた）、発達面での遅れや情緒面での不安定さがあり、周りの子に不意に暴力を振るつた



▲ぼくらの　かいつけゾロリ

りする。力も強いので、彼を恐れて近づかないようにする女の子もいた。しかし、全く勉強したくない訳ではなく、たとえば、音楽の時間にピアニカを演奏する時には、弾きたい気持ちが感じられたので、私が鍵盤に階名のテープを貼ると、一生懸命吹き始めた。

彼のできるようになりたいという気持ちを探して、励ましや援助を続けていたが、困ることをした時は、どのように話したらわかつてももらえるのか見当がつかず、悩むことが多かった。

担任は、クラスの保護者からもたくさんのお情を受けていた。「隣に座らせないでほしい」「同じ班にはしないでほしい」など。困ることをした時、担任はいつも彼に優しく「Tちゃん、せんせいとつてもかなしいな」と話して聞かせていた。遅れていた学習に、放課後、時間を割いて付き合っていた。優しい愛情を受けたことの無い彼に、時には叱ることもあつたが、決して突き放すことなく優しく接していた。そんな担任

を、私は歯がゆく思つたこともあつた。でもその時の彼には、あくまでも優しい愛情が必要だつたのだろうと今は思う。

私もまた、彼の学習を何とか援助しようと努力してきた。みんない子になりたいし、勉強ができるようになりたいと思っているのだ。悪い子になりたいとは誰も思つていないので。

私は、厳しさと優しさのバランスの大切さを、この

担任の先生に教えていただいた。

「ミワセンセイてさ、どうしてそんなに
いろんなことしつてるの！」

作品展では、幼稚園での経験を生かして「指人形」作りに取り組んだ。

導入から、作業の全過程を主になつて指導することになり、子どもたちの前に立つた。幼稚園の現場で幼児と共に作ったものを、一年生の発達に合わせて方法を変えて指導した。

自分だけの人形を作れることを、子どもたちはとても喜んで、一つひとつの説明を熱心に聞いてくれた。人形の頭に和紙を張る作業は、単調な繰り返しではあつたが、徐々に形が見えてくると、やり遂げることの充実感を味わうことができ、生き生きと取り組み、前述のようなうれしい言葉を日々にかけてくれたのだった。

子どもたちにとつての副担任は、困つた時「センター」と助けを求めたり、我がままを言え、甘えられる存在だ。しかし、子どもの自立を願うなら、子どもに慕われる心地よさだけに安住してはいけないと痛感した三年間であつた。このような難しさもあつたが、

自分なりに、幼稚園での経験を生かして、うまく担任との連携を図り、教育活動にかかわれたのではないかと思つている。

今は、機会があれば、子どもとかかわる現場に戻りたいと願つている私だ。

(お茶の水女子大学)